

平成22年度遺跡速報展 前期展
(報告書刊行編)

いにしへのツギハメ '10



本郷遺跡の土坑に埋められていた須恵器の大甕

みやのうえせき

宮ノ上遺跡 (四国中央市中之庄町)

宮ノ上遺跡は、宇摩平野西部に所在する緩やかな傾斜地である扇状地の扇端付近に位置しています。発掘調査では柱穴状遺構 114 穴を検出しましたが、明確な建物を復元することができませんでした。また遺物もわずかで遺構に伴うものはありませんでしたが、15 世紀に作られた土釜があることから、遺跡の時期は 15 世紀までと考えることができそうです。こうした柱穴状遺構は建物を構成する柱ではなく、柵、あるいは単独で建てられた柱などを想定することができます。また近くを走る県道上猿田三島線は伊予・讃岐間を結ぶ街道であることから、今回の調査成果はこうした交通路との関連性も考えなければなりません。遺構が特に集中する調査区北西側は旧街道と枝道の分岐点に接することから、「辻」との関連性が指摘できます。今回見つかった遺構は集落の一角ではなく、街道沿いにおける人の活動の跡としてとらえるべきであり、交通という要素を中心に遺跡を考える必要があります。



遺跡全景 (西から)

ほんごういせき

本郷遺跡 (新居浜市本郷)

本郷遺跡は、新居浜平野の西部に位置する古代の遺跡です。この地域は古代には神野郡 (のちに新居郡に改称) が設置され、遺跡が存在する「本郷」にはその役所 (官衙) が置かれ、またすぐ近くには当時の国道である南海道が通っていたのではないかと推測されていました。

調査の結果、掘立柱建物 4 棟、土坑 11 基、柱穴 96 などの遺構を検出し、主に 8 世紀後半から 10 世紀前半 (平安時代) にかけての遺物が出土しました。見つかった掘立柱建物は大きな柱穴をもつ立派な建物で、出土遺物の中には京都や滋賀で焼かれた緑釉陶器という当時の高級食器も含まれています。また、お墓も見つかっています。このお墓からは炭とともに焼けた人骨が出土しており、火葬した骨を埋めたものと考えられます。当時、火葬することが許されるのは僧や役人など、ごく一部の階級の人に限られていたと考えられます。

今回発見された建物やお墓、緑釉陶器などの出土品は、一般庶民ではない人が住んでいたことを示すもので、役所に関する施設であった可能性が高く、近くに役所が存在しているものと考えられます。



掘立柱建物

どうごまちいせき

道後町遺跡 3 次 (松山市道後町)

道後町遺跡は、松山市北部に立地する弥生時代から中世にかけての遺跡です。道後町のすぐ東には中世伊予国を支配した河野氏の居城である道後湯築城跡があり、道後町遺跡周辺には、湯築城の城下町が広がっていたと考えられています。今回の調査は平成 10 年度から 12 年度にかけて実施した 1 次・2 次調査に続く 3 次調査となります。

今回の調査場所は伊予鉄道後温泉駅の目の前で、調査区の北はアーケード商店街、南東は足湯やからくり

時計が設置された放生園で、道後温泉観光の玄関口にあたります。昔この付近は道後鷺谷から流れ出る川と、宮前川との合流地点となっていて、1973 年に埋め立てられるまでは放生池と呼ばれる沼が存在していました。

調査範囲は東西 7m、南北 12m 程度のごく狭い範囲ですが、調査の結果、16 世紀後半の土坑 2 基、溝 3 条、柱穴 5 を検出しました。このうち溝は建物に伴う溝と考えられ、土器器杯などとともに天目茶碗が出土しています。天目茶碗はお茶を飲む器で、当時お茶を飲むことができるのは、武士や僧侶など上級階層の人に限られていましたので、この付近には立派な屋敷が建っていたのではないかと考えられます。池を眺めながらお茶を飲む優雅な風流人が住んでいたのかも知れません。



溝から出土した土器

きたいどいせき
北井門遺跡 (松山市北井門町)

北井門遺跡1次調査は、国道33号から松山インター料金所までの約500mの直線区間の範囲で実施しました。この東西500mの範囲から、約200棟の^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居をはじめとする弥生時代前期から近世の集落跡が見つかっています。

弥生時代前期の遺構は主に調査範囲の西側から、大型の^{つぼ}壺を棺としたお墓や、^{せつけん}土器や^{どこう}石剣が入った土坑が見つかっています。後期の遺構は中に大量の土器を置いた溝や、^{かじろ}鍛冶炉を持つ^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居、土器捨て場として使用された^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居や土坑、土器をおいたまま放棄されたような^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居などがあります。遺物では朱の^{いしうす}ついた石臼や^{いしきね}ベンガラをついた^{いしきね}石杵・土器などがあります。

古墳時代では、前期の^{ぜんぼうこうほうふん}前方後方墳(北井門古墳)や多くの^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居が見つかり、中でも住居の床にまとめて置かれた^{はじき}土師器高杯や^{たかつき}小石を入れた^{すえき}須恵器有蓋杯などは、住居を廃絶する時のマツリを示すものと考えられます。また、古墳時代の^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居は東西の溝によって分けられた中に作られていることも分かりました。さらに住居にはいち早く^{しよきすえき}朝鮮半島から伝わった^{かまど}カマドや^{しよきすえき}初期須恵器を取り入れるなど、先進的な集落であったことも分かりました。

中世では、^{どなべ}土鍋を利用した^{じちん}地鎮の跡や様々な方向に掘られた^{ほったてばしらたてもの}溝・掘立柱建物などが見つかっています。



密集した堅穴住居

いわくらじょうあと
岩倉城跡 2次 (宇和島市三間町曾根)

岩倉城跡は、宇和島市三間町に所在する中世の山城跡です。平成17年度に実施された1次調査の南西約50mの地点で平成20年10月下旬から12月中旬にかけて2次調査を実施しました。

調査では、^{くるわ}郭・^{きりぎし}切岸・^{いぬぼし}犬走り・^{たてあなじょうたてもの}堅穴状建物・^{もんあと}溝状遺構・^{どこう}階段状遺構・^{ちゆうけつ}門跡・^{ちゆうけつ}土坑・^{ちゆうけつ}柱穴などの遺構を検出しました。陶磁器・^{とうじき}備前焼・^{びぜんやき}土師器などの出土遺物から15世紀頃の遺構であったことが推測されます。

確認された遺構の中でも、中世期の^{たてあなじょうたてもの}堅穴状建物は県内でも確認事例が少なく、南予地方においては初例と思われます。一辺が約2.5~2.7mの方形で、門の内側にあることや規模・構造からみて見張り小屋的な機能を持つ建物と考えられます。またこの^{たてあなじょうたてもの}堅穴状建物へ通じる^{こぐち}階段状遺構・^{もんあと}虎口・^{もんあと}門跡などの一連の遺構も注目されます。

検出した郭7面のうち6面は縄張り調査では確認されておらず、発掘調査によって新たに確認されたものでした。第28郭は幅約1mと狭く、^{いぬぼし}犬走り(通路)としての機能が考えられます。^{きりぎし}切岸は高さ約2m、傾斜角約50°となっており、容易に登ることはできません。



堅穴状建物

しもいしとこいせき

下石床遺跡 (四国中央市中曾根町下石床)

下石床遺跡は宇摩平野西部の緩やかな傾斜地である扇状地の扇中央付近に位置しています。遺構数も少なく、出土遺物もわずかでしたが、そうした中で成果として特筆できるのが、1区で見つかったSB-01です。この掘立柱建物は、3面に廂もしくは縁状の張り出しを有し、周囲に雨落ち溝と思われる溝が巡っています。一方、建物の北西側だけは柱穴の中に柱を固定する根石が据えられており、廂(あるいは縁)や建物内の間仕切りがありませんでした、このことから、この建物は北西側が入り口だった可能性が考えられます。出土遺物から



SB-01

判断して、建物が建てられた時期は12世紀末から13世紀初めころと考えられます。また、建物の周りには同時期の建物や遺構がまったくありませんでした。建物の規模が比較的大きいこと、銅銭などが建物の近くから出土していることも合わせて考えると、これは堂や祠などの宗教施設であった可能性が考えられます。今回の調査成果から、生活の場や信仰の場など、機能によって空間が分けられた中世集落を復元することができそうです。

きゅうけんじゅいんあと

旧観寿院跡 (四国中央市土居町大字土居)

旧観寿院跡は、関川右岸に残る中期段丘上に営まれた弥生時代から中世にかけての遺跡です。遺跡の北東側には古代寺院跡として知られる旧観寿院跡があり、寺域や構造の解明が期待されましたが、今回の調査では、古代寺院関連の資料は得られず、旧観寿院跡の寺域は他所に広がっていたことが判明しました。

遺跡の主体を占めるのは弥生時代の遺構・遺物で、当時の集落の北端が見つかりました。検出した遺構には方形の竪穴住居2棟や土坑(素掘りの穴)、土器棺墓(土器を棺とする墓)などがあります。この土器棺墓の土器の破片が竪穴住居1棟からも出土しており、竪穴住居に住んでいた人が亡くなった際にここに埋葬されたものと考えられます。土器棺墓はこれまでも他の遺跡で複数見つっていますが、住居と墓の関連性を示す数少ない例として注目されます。



竪穴住居に捨てられた土器

また、遺跡から出土した土器の大部分は地元で作られたものでしたが、なかには讃岐地方や近江地方といった遠い土地から持ち込まれたものがあり、これらは当時の人や物の交流を考えるうえで良好な資料といえます。